

心を耕し、生きる力を養う授業の構想と展開

－「感じとる心」を豊かにする授業の構想と展開－1年次

山口大学教育学部附属光中学校

1 研究主題と研究主題設定の背景

(1) 本校研究のめざすもの

私たち教師はすべての子どもに幸せな生涯を送ってほしいという願いを持っている。そのため、本校でも子どもたちに必要な知識や技能を身につけさせていくことに力を入れている。しかし、知識や技能が養われても、それだけで豊かな生活が送れるだろうか。幸せな生活を送るためには知識や技能とともに、それを生かす「心」「その人の人柄」「人間性」というようなものが大切であると考えている。

私たちは子どもの心を耕し、子どもたちが21世紀を幸せに生きるための力を養う学校教育をめざそうとして研究に取り組んでいる。

(2) 研究主題設定の背景

本校は昭和63年度までの3年間「自ら追究し、高め合う授業の創造」を主題として、「子ども自身が学習の主体者として、追究的、意欲的に取り組む授業」や「集団の中で相互にかかわり合い、みんなで高め合う授業」をめざして実践を積み重ねてきた。

そして、私たちはこの実践を通して、「生徒の発言が多くなった」「授業が盛り上がるようになった」などの成果を得ることができた。しかし、一方で、「他人に対する温かい思いやりの心が育っていない」「互いに牽制し合い、一人ひとりがのびのびと活動できる集団になっていない」という問題点も点在していることに気づいた。そこで、本校の「生徒像」をもとにして本校生徒の長所と短所をアンケート調査し、その結果から「子どもたちの心を育てよう」「授業で心を育てよう」という熱い思いをもつようになったのである。

私たちの「心を育てよう」という思いは、次の二つのことにも支えられている。

その一つは、中学生時代は感受性の豊かな時期であり、心を育てる好機であるということである。例えば、子どもは、先生や友だちの一言によって、あるときは心をときめかせ、あるときは、勇気づけられたり、心を傷めたりする。このような時期だからこそ、教師の直接的・間接的な心への働きかけにより、心情的に支え合いながら、楽しく、有意義な学校生活を送らせることで心を育てることができると考えられる。

もう一つは、心を育てることが社会的な要求であるということである。新聞では、心が育っていない青少年の問題がとりざたされ、社会全体が心の貧弱さを憂えている。そして、教育課程審議会の答申にも改善のねらいとして「豊かな心を持ち、たくましく生きる人間の育成を図ること」と大きく取り上げられていることなどからも、心を育てることの大切さを理解していた

だけだと思う。

(3) 本校が「育てたい心」

そこで、私たちは心に視点をあてて、以下のような「心」を育てようとしている。

- 真理を求める心
- 自然を愛し、美しいものや崇高なものに感動する心
- 生命を尊重する心や他人を思いやる心
- 感謝の心や公共のためにつくす心
- 自ら生きる目標を求め、その実現に努めるために最後まで粘り強くやりぬこうとする心

これらの「育てたい心」は次のような手順で決めた。まず、教科で育てたい心、または教科で育てることのできる心を出し合った。そして、それをまとめてみると、教育課程審議会の答申「豊かな心を持ち、たくましく生きる人間の育成を図ること」の項目とほとんど一致した。そこで、新しい教育課程を踏まえながら、前述の5つの心を本校の「育てたい心」に決定したのである。

(4) 研究主題

もちろん、それを、学校の全教育活動において、教師が連携し合いながら子どもの心を育てていく必要があると考えているが、まず、学校の生活の大部分を占める授業で、子どもの心を育てなければならないと考えたのである。そこで、その授業において「心」を耕すことにより、前述の5つの心を育てることができ、すなわち、「生きる力」も養うことができると考え、研究主題を「心を耕し、生きる力を養う授業の構想と展開」と決めた。

2 「感じとる心」を豊かにする授業の構想と展開（1年次）

(1) 副主題設定の意図

しかし、子どもの心を育てるといっても、教師が一方向的に指導していくのではない。子どもに価値あるものにふれさせ、子ども一人ひとりがもつ思いや考えを出し合わせ、豊かに感じとらせることから「心」を育てていきたい。つまり、私たちはこの「感じとる心」を豊かにすることが、「心を育てる授業」の第一歩だと考えた。

そして、私たちは、この研究で子どもが次の二つのことを感じとる心が豊かに育ってほしいと願っている。

- 教材の奥にひそむ、自然や人間の美しさや素晴らしさを感じとる心
- 友だちとのかかわり合いを通して、人間の素晴らしさ・温かさを感じとる心

そして、この二つのことを感じとる心が豊かになると、温かいまなざしで見える目、注意深く聞く耳、ものの本質を見抜く力が育ってくると考えるのである。

そこで、私たちは、次のような仮説をたてて研究実践を積み重ねてきた。

(2) 仮 説

- 教科のもつ人間形成的側面に着目した教材解釈・発問づくりを行い
- お互いの思いや考えを集団の中に出し合わせ、響き合わせるならば
- 自然や人間の美しさや素晴らしさなどを「感じとる心」を豊かに育てることができる

それでは、仮説の一つである教科の持つ人間形成的側面に着目した教材解釈・発問づくりについて述べよう。

(3) 教科のもつ人間形成的側面から教材解釈・発問づくりをする

私たちは教科のもつ人間形成的側面から教材解釈・発問づくりをすることで「感じとる心」を豊かにすることができると考え、次のようなことを実践してきた。

① 教材のもつ人間形成的側面とは

私たちは、子どもたちが心身ともに調和の取れた発達をすることを願っている。また、生涯を通じ学び続けるための基礎・基本を身につけさせたいと思っている。このような人間形成を援助するために、学校の全教育活動が組織され、各教科もその役割を担っている。

そこで、私たちは「教科のもつ人間形成的側面」を次のようにとらえた。

教科において、知識、技能、興味、関心、態度を互いに関連させながら身につけさせ、ものの見方、考え方、行動の仕方や人間としての生き方、あり方を高めることができる側面

つまり、「子どもたちが自然や人間の美しさや素晴らしさなどを学びとり、自然や人間に対する、豊かな感じ方、考え方を身につける」ことを教科でめざそうとするのである。

そして、このような教材のもつ人間形成的側面に着目し、次のような視点から教材解釈しようとした。

- 科学や芸術の本質を理解させる
- 人間のもつ知恵、生活の改善に目を向けさせる
- 人間の生き方、あり方を見つめさせる
- 子どもの多様な見方、考え方を引き出す
- 子どものもつ感性を引き出す
- 子どもの発達要求、挑戦意欲、学究的態度を引き出す

② 子どもの「感じとる心」を豊かにする教材解釈

私たちは教科のもつ人間形成的側面に着目して教材解釈をすることで、子どもと教材との出会いを豊かなものにしようとした。子どもたちが自分たちの思いや考えを大切に、教材を通して、自然や人間と豊かにかかわり合う。そのことによって、子どもたちのものの見方、考え方、行動の仕方や人間としての生き方、あり方が高まっていくと考えたからである。

教科のもつ人間形成的側面に着目した教材解釈をするとき、教材そのものがもつものの見方、

考え方、行動の仕方や人間の生き方、あり方に鋭く迫るものもあるが、教師の解釈によってはじめて人間形成的側面が見出されるものもある。

そこで、子どもの「感じとる心」を豊かにするには次のことが大切になる。

各教科のどの授業においても、教材やそれを学習する過程に、子どもが、ものの見方、考え方、行動の仕方や人間としての生き方、あり方を学ぶことが必ず含まれていると考えて教材解釈をする。

つまり、教師は、教材を解釈するときに、次のことを考える必要があるのではないだろうか。

- 教材のもつ、子どもに学ばせたい自然や人間の美しさや素晴らしさを明確にする
- 子どもを主体的に教材に立ち向かわせ、教材を通して、自然や人間と豊かなかかわりをもたせる
- 子どものさまざまな思いや考えを出し合わせ、子ども同士をかかわらせる

③ 教材の価値を教科のもつ人間形成的側面から明確にする

「感じとる心」を豊かにする教材とは、まず子どもが豊かに感じたり、考えたりするだけの値打ちをもつ教材でなければならない。子どもが自分の生活体験や学習体験をもとに、教材に立ち向かい、その背景にある自然や人間の美しさや素晴らしさなどを感じとることができる教材でなければならない。そのためには、教師にとって次のことが必要になる。

子どもの実態をふまえ、子どもが教材のもつ自然や人間の美しさや素晴らしさを学ぶことから、どう自己を見つめることができるかを明確にする。

例えば英語科では、3年生の受験を控えた時期に、教科書教材「アンネの日記」を学習させる。不当な差別によって隠れ家生活を強いられ、空腹や死への恐怖などの厳しい状況の中にあっても、明るく生きようとするアンネの生き方の素晴らしさが、英文の行間からも伝わってくる。

生徒の、ともすれば困難から逃げ出したいという現実の重いと、アンネの苦しい状況における人への思いやりとが対比され、子どもの心を揺り動かす好教材である。

そしてただ、英文の意味、内容を理解させるだけではなく、戦争、ユダヤ人への迫害などの時代的背景も考えさせ、「アンネの生き方」に対するお互いの思いや考えを出し合わせ、響き合わせることによって、生徒たちに現在の自分の生き方を見つめさせることができるのである。

④ 子どもを主体的に教材に立ち向かわせる発問づくり

子どもの「感じとる心」を豊かにするには、準備した教材に子どもを出会わせるとき、子どもに主体的に取り組ませることが大切である。そのためには、まず、「おかしいぞ」「どうしてかな」と子どもに疑問をもたせ追究させることが必要である。そこで、私たちは子どもを主体

的に追究的にかかわらせるために、発問を中心にして授業を構想している。

そして、子どもを教材に立ち向かわせるために、次の点に留意して発問を考えている。

- 限定して問う ○ 未知と既知の間を問う
- 思考の流動性を引き出す ○ 対立・分化を引き起こす

例えば国語科で、「走れメロス」を扱うとき、子どもが否定的に見がちな王について、「この王が良心をもった人間として肯定できる面はないか」という問いを投げかけてみる。すると、子どもたちは「おやっ」という表情で、文章を読み始め、さまざまな肯定できる点をあげてくる。そして、お互いの考えが対立・分化する中で、子どもたちは文章をより検討するとともに、人間の生き方について深く考え合い、真剣なまなざしで語り合うのである。

⑤ 子どものさまざまな思いをもとに、教材に豊かにかかわらせる

さらに、子どもの「感じとる心」を豊かにするには、子どもの多様な見方、考え方を生かして教材に豊かにかかわらせ、子どもに発見や成功の感動を体験させることが大切になる。

そのためには、次のようなことが必要である。

発問に対し、子どもたちがどのように反応し、どのように対立・分化するか、そして教師はどのように対応して、方向づけ、組織していくかなど、授業展開を具体的に予想し、先取りして、構想していく。

例えば、美術科では、「自分たちが住む街（光市）の案内パンフレット」のデザインを教材として取り上げた。子どもたち一人ひとりが、光市の特色・風物・行事・名所の中から、四場面を選び、アイデア豊かな図案を考え、着色して、台紙に貼るのである。

この図案の下絵づくりの段階で、子どものいろいろな問題点を子どもたち自身に発見させ、さらに、学級のみみんなで検討させ、改善させるために、教師は次のような授業展開を考えた。

子どもの現状を把握したうえで、教師が意図的に問題点のある作品を提示し、「Aさんは夏休みのある日、フィッシングパークで魚釣りをしているところをデザインしようとしています、Aさんへのアドバイスをみんなで考えてあげよう。」と投げかける。

次に子どもが出してきた問題点を太陽、海、魚等の項目別に分け、分担して改善させる。さらに、分担した項目を合成して新たな作品を作らせ、クラスに発表させる。この発表で各班の作品の工夫されている点に感嘆させたり、問題点を新たに見つけさせたりすることにより、自分の作品の改善の視点を学ばせる。

このような授業を構想することで、子ども同士がお互いの素晴らしい発想を認め合い、「感じとる心」を豊かにすることができるのである。

(4) 互いの思いや考えを集団の中に出させて響き合わせる

中学生時代は他人のことが気になる時期である。そのため互いに牽制し合い、授業においても

意見が出にくい状態になることもある。しかし、意見を出し合うことができれば、友だちの意見に心を動かされながら学んでいくこともできる。

それでは、教師は子どもと子どもを響き合わせるためにどのような働きかけをしようとしたか、仮説のもう一つの道筋である子ども集団の主体づくりについて次に述べてみよう。

① 子どもに思いや考えをはっきりもたせ、出させる

子ども同士が響き合う授業をするには、まず、子ども一人ひとりに自分の思いや考えをはっきりもたせ、出させることが大切である。なぜなら、同じ教材であっても、子どもたち一人ひとりの興味、関心、考え方、感じ方がそれぞれ違い、子どもはさまざまな思いや考えをもつからである。そして、自分の意見をはっきりもたせ、出させることによって、子ども一人ひとりが学習に主体的に参加することができるからである。

そこで、私たちは次のような手だてを授業の中に取り入れようとした。

- 話し合う前にノートやカードに書かせる
- わかる、わからない、賛成、反対など、手を挙げてはっきりと意思表示させる
- 実験、操作、表現などの活動を通して、身体に働きかける

私たちは子どもの個性的な思いや考えを出させることが子どもが響き合うためには必要だと考えている。

② 子どもの思いや考えをかかわり合わせる

子どもがさまざまな思いや考えをもち、集団の中に出し合うようになると、次に、出し合った思いや考えをもとに子ども同士がかかわり合うことが大切になる。教師は次のように働きかけてかかわりをもたせることができる。

○ 班を活用させる

班におろすと、自分の思いや考えを出しやすくなる。そこで、互いの思いや考えを練り合わせる。

○ 答えに終わるのでなく、その根拠を求めさせる

子どもから出てくる意見や答えが教師の予想した正解であっても、そこで終わるのではなく、「なぜ」「そのわけは」「どこから」など、根拠や出所を求め、吟味して、もう一度授業のねらいや教えたいことへ立ち向かわせる。

○ つまずきを取り上げ、かかわり合わせる

子どものつまずきを取り上げ、全員でその原因をたどっていきながら、一層深く対象を理解させ、自分の考えを明確にさせる。

○ 対立点を明確にし、自分の立場をとらせる

子どものさまざまな受けとり方に対して、対立点を明確にし、自分の立場を取らせることにより、より主体的にかかわり合わせる。

○ 接続語でかかわり合わせる

授業展開の中で教師が子どもに「それから」「たとえば」など接続語でかかわっていく。そのことにより、子どもは他の子どもに自分の思いや考えを表現するために接続語を自然に使ってかかわるようになってくる。接続語でかかわることは、決して「〇〇くんにつけ加えます」「△△さんと同じですが」などの発表形式を身につけさせることが目的ではなく、理解を深めたり、思いや考えを発展させたりすることをめざすものなのである。

③ 授業の中で、子どもの活動を値打ちづける

授業の中で子どもと子どもが響き合うには、子どもが互いの値打ちを見つけ合い、かかわり合いながら高まっていくことの素晴らしさを実感することが必要である。そのためには、教師が子どもの値打ちを見つけ、肯定的に評価することによって、子ども同士が自分たちの値打ちを見つけ合おうとする意識を少しでも育てたい。そこで、その場その場で、次のような観点から子どもに活動を値打ちづけようとした。

- 子どもの悪い点より良い点を
- できなかったことより、できていることを

例えば、次のようなことである。

- 友だちの意見を静かに聞いているとき、「学級が勉強する雰囲気になってきたね。」と値打ちづける。
- 英語の授業で答えがあっているとき「Good」と大きな声で言うなど「ここはできた」とみんなが認め、励ますことを値打ちづける。
- 自分と違った意見も受け入れ、わかり合おうとする態度を値打ちづける。

④ 授業をふりかえる場をつくる

授業の終末に「今日の授業で感じたこと、考えたこと」について発言させたり、書かせたりする。そのとき、子どもたちに次のことを理解させたい。

- 今まで見えなかった友だちの個性的な思いや考えを発見できたこと
- 自分の思いや考えを集団の中に出し、みんなに貢献できたこと
- 友だちの思いや考えを自分の思いや考えと比較して聞き、友だちの思いや考えのおかげで高まったこと、新たに疑問をもったこと

このようにして私たちは、自分の思いや考えをはっきり持ち、表現し合い、かかわり合っていくことで、学習内容がよくわかり、そのことがいかに楽しいことであるかを実感させたいのである。

(5) 子どもたちの集団を育てる

「感じとる心」の豊かな生徒を育てるには、その所属する集団自体に豊かな人間関係が育つことが必要である。私たちはこの人間関係が自然に育つのを待つのではなく、教師が指導的に評価することで育てようとするのである。

① 教師と教師の連携により育てる

中学校の教師は教科担任制ということもあり、自分の教科の時間の子どもの事実しか知らないことが多い。しかし、子どもは毎時間違う教科において新しい事実を生み出しているのである。そこで、次のようなことが大切である。

学級担任を中心とした教師と教師の連携により、子どもの響き合いを指導的に評価することで、学級に豊かで思いやりのある人間関係を育てる。

教科担任との密接な連絡により子どもの事実を知ることできるが、教科担任からの報告を待たなくても、子どもの事実を次のようなことから知ることができる。

- 班ノートに書き出される授業中のようすから
- 終わりの会の1分間スピーチから
- 学級新聞の内容から
- 学級の歴史に載せる項目探しから

※ 学級の歴史とは自分たちの学級の出来事を学級レベルの歴史として意識させ、教室背後に年表のように事実をはりつけていく活動である。

そして、担任が「それはいいことだなあ。」「学級の名誉だぞ。」など、取り上げて誉める。すると、子どもたちは友だちの発言や行為で授業が盛り上がったとか、良い経験ができたとか、良く分かったといった内容を自分たちで探し発表するようになってくる。また、これらの内容から伺えた事実をより詳しく教科担任に尋ね、学級の子どもたちに教科の先生も誉めていたと知らせることもできる。良い思いや、うれしい思いをもっている子どもたちの集団は、豊かで温かいものに育つのである。

② 学級づくりと並行して育てる

自分たちの学級が誇れるものであることの満足感を持ち、学級の一員として所属する喜びを持つことも、学級の人間関係づくりには必要なことである。そのため、学校行事に積極的に学級として参加させたい。クラスマッチや合唱コンクールなど、目標のはっきりしているものは取り組みやすい。そして、結果だけにこだわらず、その過程で団結できた事実を目を向けさせたい。そこでは、お互いの意見の対立、利害関係などを、みんなの力で乗り越えようとしたはずだからである。

また、学級の係活動なども、お互いの学校生活をより良いものにするために必要な役目を分担していることを理解させ、所属する一員としての自覚を持たせたい。そのことにより、自分

たちの学級を大切にすることを育て、係まかせでなく、みんなが協力し合える学級づくりを進めたい。

「感じとる心」を豊かにする授業の実践により育てられたものが発揮されるのは、まず、学級である。また、そのことにより、学級における人間関係が養われ、授業に還元されていくのである。

安心感のもてる学級において、子どもは、ものの見方、考え方を広くあるいは深くすることができる。

お互いの思いや考えを安心して出し合える。それは、他人の発言を認めることができ、自分たちの学級を大切にしている学級で可能なことである。

③ 仮説に対する検証

この結果、教師の働きかけに対して、前述した「感じとる心」の豊かになった生徒の活動とともに、具体的に次のような子どもの活動が見られるようになった。

○ 授業に積極的に取り組んでいる

- ・ 子どもの考えを引き出す発問に意欲的に発言している。また、人の考えに対する自分の考えを発表するようになった。
- ・ 失敗を恐れなくなっている。失敗をもとに考えをまとめたり、新たな考えを発見できることに気づいている。
- ・ 他の人との意見の違いから、自分が深まる経験により、人の意見を大切にすることを育てている。

○ 自分たちの学級を大切にしている

- ・ 生徒会行事などへの参加が、学級として主体的であり、係になっている生徒へも協力的である。
- ・ 学級独自の行事が行われている。担任の指導でもあろうが、自分たちの学級では○○をしている、という思いが育ってきている。

○ 創意工夫のある学校生活を送ろうとしている

- ・ 背面黒板や学級新聞の内容の工夫（喜ばれる内容が増えている）
- ・ 教育実習生との諸行事の運営の工夫（学級に支えられて行われている）
- ・ 生徒会専門部による諸活動（自分たちの生活をよくしようとする活動が行われている）
- ・ 生徒会役員選挙に見られる美しいポスター制作や選挙運動の工夫

○ 円満な人間関係づくり

- ・ 学習を進める中での教師と生徒とのふれあいの深まり
- ・ 学習するもの同志として、生徒間の豊かで温かい人間関係の深まり

3 終わりに

以上、本年度の本校の研究について述べてきた。研究実践の結果、子どもたちは、教師の働きかけによりかなりの活動ができるような心が育ってきている。しかし、自ら課題を見つけ解決していくとか、温かい人間関係を自らつくろうとしていくとか、より主体的に教師の教えたものに立ち向かうという面については、まだかなり改善しなくてはならない面を残している。そこで、私たちは子どもの「感じとる心」を豊かにする授業を実践するとともに、2年次においては、「追究する心」を育てる授業に取り組み、子どもの「心」を耕していきたい。